

国士館創立者

柴田徳次郎

生誕一三〇年記念

かく語りき



学校法人 国士館

Kokushikan



創立者 柴田徳次郎

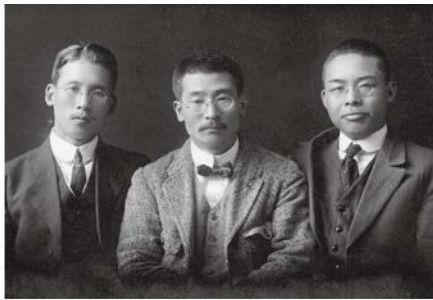
しばた・とくじろう 1890.12.20-1973.1.26

1890 (明治23) 年12月、福岡県那珂郡岩戸村別所 (現・那珂川市) に生まれる。15歳で上京し、苦学の末に早稲田大学専門部を卒業。在学時より同郷の頭山満、野田卯太郎、中野正剛らの知遇を得た。

1917 (大正6) 年11月、26歳で同志とともに国土館を創立。国土館を法人化するとともに、諸学校を設置して多くの青少年に門戸を開き、文武両道の精神を基本とする人材の育成に努める。戦災で校舎を失う苦難を乗り越え、国土館の復興・再建をはかり、中学校・高等学校・大学・大学院を一貫する総合学園の基礎を築いた。1973 (昭和48) 年1月に永眠、享年84 (満82歳)。正四位勲二等瑞宝章。経済学博士。

教育にすべてを捧げた柴田の志は、今なお脈々と受け継がれている。





主要編著書

- 柴田徳次郎編・頭山満述『頭山翁清話』（大民倶楽部、大正12年）
- 柴田徳次郎著『日本を如何にすべき』（大民倶楽部、大正13年）
- 柴田徳次郎著『革命は如何にして起るか』（羅典書院、大正14年）
- 柴田徳次郎述『国士館と教育』（財団法人国士館、大正15年）
- 柴田徳次郎編・頭山満述『頭山翁清話（大民文庫3）』（大民社、昭和15年）
- 柴田徳次郎述『芝生は緑なり—ロシア革命はレニンか明石か—』（国士館大学出版部、昭和30年）
- Tokujiro Shibata『LAWNS ARE ALWAYS GREEN（『芝生は緑なり』英文版）』（国士館大学出版部、昭和30年）
- 柴田徳次郎著『革命は如何にして起るか（改訂増補）』（国士館大学出版部、昭和39年）
- 柴田徳次郎著『日本はこうすれば立直る』（国士館大学出版部、昭和39年）
- 柴田徳次郎著『日本を如何にすべき』（国士館大学出版部、昭和43年〈大正13年改訂〉）

学位論文（経済学博士号取得）

昭和45年12月「革命は如何にして起るか」（国士館大学大学院論文博士第1号）



若き創立者

「活学を講ず」の理想

国士館を創立した時、柴田は弱冠26歳、無名の青年であった。

福岡の貧しい農家に生まれた柴田は、幼少時より困窮する人々を助けたいとの志を抱き、勉学のため15歳で単身上京し、牛乳配達など苦学の末に早稲田大学専門部を卒業する。当時の日本は、急速に近代化を遂げた一方で、伝統文化の軽視や貧富の拡大などにより、社会は疲弊する状況にあった。柴田が抱いた志は、社会の歪みを改めたいという信念となり、次の時代を担う青年層への教育に着目して、1917（大正6）年11月、同世代の同志と共に、新たな教育機関・国士館を創立した。国士館の教育は「真の智識人」の育成にあり、新たな時代に相応しいその趣旨に多くの支援者を得て発展を遂げた。それは、従来の形式的な近代的学術の教授のみならず、軽視されつつある伝統文化に基づいた人格形成を主眼とした教育にあった。地位も財産もない若き柴田らは、将来の日本社会を担う国士館の理想を説き、明治期に活躍した名士らの支援を得て、次第に教育の環境を整えた。

奉己勤學
見識志

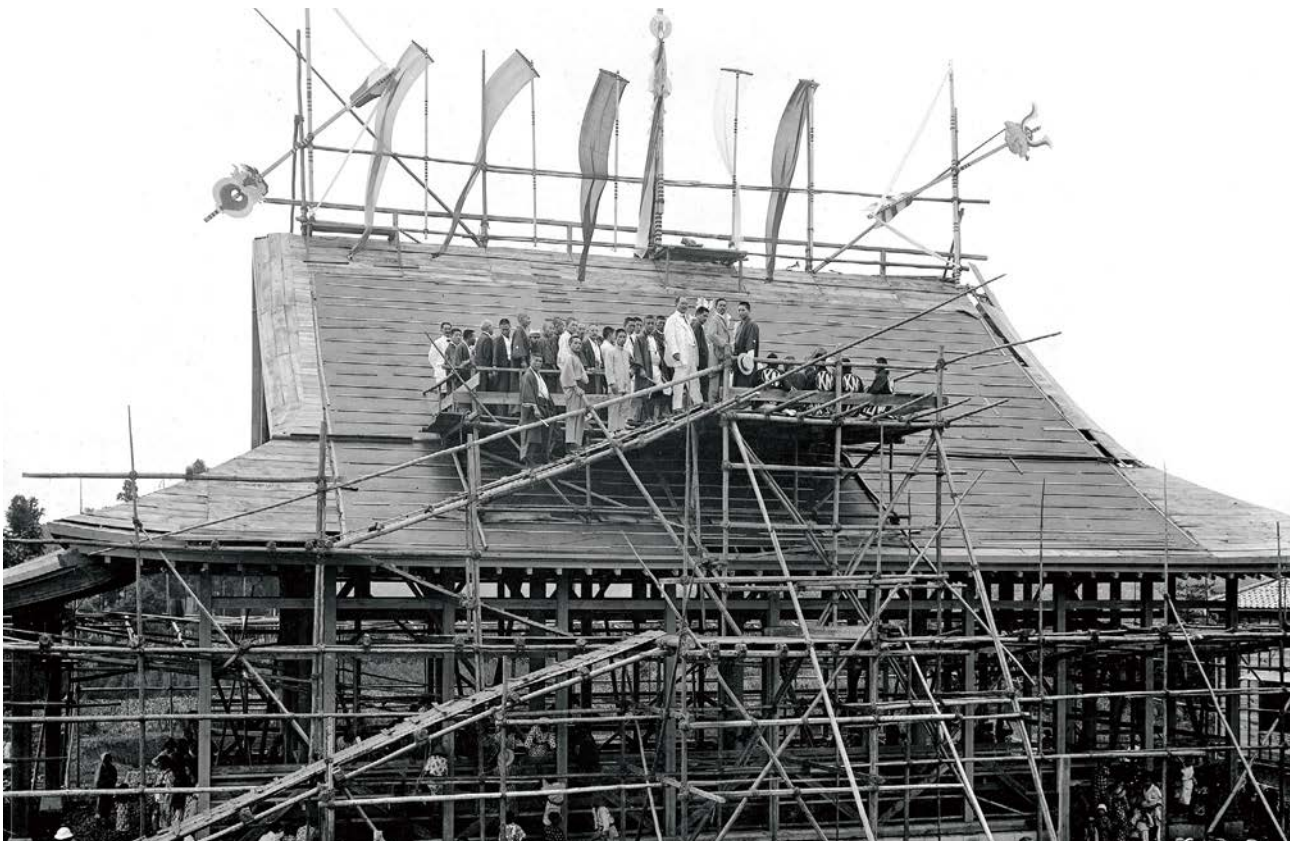
★ 柴田徳次郎揮毫「誠意・勤勞・見識・気魄」

四徳目「誠意・勤勞・見識・気魄」の起源は、柴田が欧米視察から帰国した直後の1922（大正11）年4月15日、今後の国士館の進むべき信条として披露した「誠意の智恵、勤勉の勇氣」の言にある。

国士館の「設立趣旨」に掲げた「国家の柱石たるべき真智識者」の養成のため、教育の標語となる四徳目は、1924年11月の徳富蘇峰への書簡や1926年11月の『国士館と教育』などに、その成立を確認できる。

この一紙は、1960（昭和35）年頃の揮毫と推測されるが、後に大学・短期大学の卒業生に配布された同色紙の筆跡とは異なっている。





1919 (大正8) 年7月27日 大講堂上棟式

「大正の松陰塾」たらんとした国士館は、世田谷の松陰神社隣接地に移転し、その理念を体現する大講堂などを建設して、教育の基盤を整えた。



1926 (大正15) 年6月3日 国士館完成長老懇談会記念

国士館は、1921年に発足した国士館維持委員会をはじめ、多くの名士らの支援によって、国士館専門学校をはじめとする諸学校を創設した。
(前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰、後列左より花田半助、渡邊海旭、柴田徳次郎)

時代と人をつかむ

国士舘大学の創設

国士舘の進展において柴田は、各時代の政財界で活躍する名士らの支援を得た。創設期には1921(大正10)年7月に発足した国士舘維持委員会の支援を、戦後は1952(昭和27)年8月に発足の国士舘大学維持委員会による支援を受けて、教育環境の整備と拡充を図った。特に戦後日本の苦難の時代において国士舘は、戦災でほとんどの校舎を焼失し再出発を余儀なくされた。柴田は、国士舘の再建を果たすため、政治家・緒方竹虎、小坂順造、松野鶴平らの人脈を頼って支援者を募る。当時、戦後国際社会への再出発を果たしたばかりの日本社会は、不安定な状況下にあった。そのなかで「国士舘再建趣意書」では、長年築いてきた教育の伝統である「文武は鳥の両翼、車の両輪」「武なき文をもつては徳性の完成を期し得ない」とする趣旨を謳い、支援を募った。創立以来の根幹である「国の役に立つ人間を育てる」という理念は、国士舘の教育に期待する政財界の名士らの賛同を得て、1953年に国士舘短期大学を、1958年には国士舘大学(体育学部)を創設し、総合学園への歩みを進めるのである。

雉救林火

柴田徳次郎揮毫「雉救林火」(雉、林火を救う)

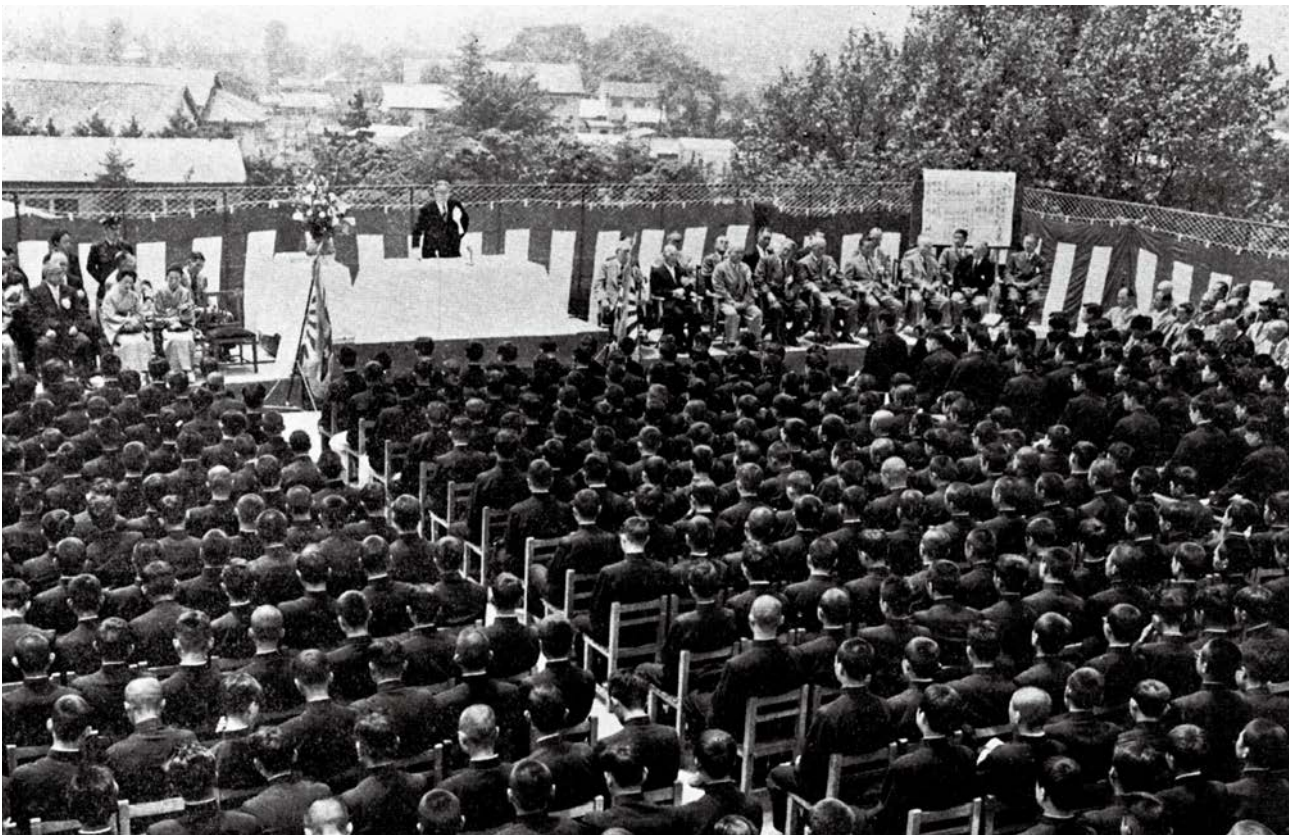
柴田が、緒方竹虎ほか国士舘再建支援への報恩と、戦後の日本を国士舘が先導する決意の念を示すために揮毫したものである。これは、必死に山火事の鎮火を試みる一羽の雉を、見かねた神々が手を差し伸べたとする「阿含経大智度論」の逸話から、柴田が着想を得たとされる。

この一紙は、末尾に「創立満三十有七年大学校舎新築落成記念」と記されるように、1954(昭和29)年11月4日に挙行了した短期大学新校舎落成式(3号館)を記念し、柴田が揮毫したもの。現在の大講堂内に掲額される扁額「雉救林火」は、筆が異なるものの同時期に揮毫されたと推測される。



1955 (昭和30) 年5月19日 国士館再建感謝報告会 (国士館大学維持委員会)

国士館の復興・再建を支えた各界名士の支援は、宿願であった国士館大学の創設を果たし、後の総合大学化へと向かう第一歩となった。
 (左手前より安川第五郎、木村篤太郎、有田八郎、小坂順造、緒方竹虎、松野鶴平、出光佐三、1人おいて古野伊之助、石井光次郎、右奥に柴田徳次郎)



1958 (昭和33) 年5月27日 国士館大学体育学部開学校舎落成式 (首相岸信介来学)

野村吉三郎・松本健次郎・椎名悦三郎ら多くの来賓を迎えて挙行了した大学開学式は、当時の首相岸信介も閣議後に来学し祝辞を寄せた。

生 涯 教 育 者 と し て

創立者の「遺訓」

柴田は、国土館の創立以来、約60年にわたって教育の場に立ち続けた。

1958（昭和33）年の国土館大学の創設以降、相次ぐ学部学科の新設によって、大学院・大学・高等学校・中学校を擁する総合学園へと発展を遂げた。これに伴い学生・生徒数も急増したが、柴田は、学園経営に奔走する一方で、毎週の「館長訓話」や一人ひとりへの「卒業面接」を自ら行うなど、個々の人間力を高める独自の教育を展開する。学園の規模が飛躍的に拡充する一方で、創立以来の理念の根幹である学生・生徒の人格形成を重視し、自らの信念を貫いていった。特に「館長訓話」で柴田は、国土館の歴史や自らの人生観のほか、世界の偉人・社会情勢や政治動向・礼儀作法・道徳など、学生・生徒に向けて多くの言葉を語りかけた。

晩年、脳溢血を患いながらも訓話に登壇した柴田は、第一声で「学生諸君、会いたかったよ」と発し、その場の学生らは皆、涙したという逸話が残っている。国土館の教育に生涯を捧げた柴田は、厳しくも慈愛に満ちた教育者であった。

任重而道遠

たゆみなく登らば、つひに踏み越えんよ志須弥山のいかに高くも

柴田 徳次郎

✿ 柴田徳次郎揮毫「任重而道遠」（任重くして道遠し）

中国の古典『論語』泰伯篇の有名な一節「任重而道遠」から、柴田が揮毫したもので、後文には「たゆみなく登らば、つひに踏み越えんよ志須弥山のいかに高くも」と続いている。昭和30年代初頭、柴田は卒業生や善行の学生らに対し、多忙の合間をぬって自筆の色紙を贈った。柴田が色紙に込めた教えを胸に、多くの卒業生が社会へと巣立った。

大学・短期大学の卒業生が急増した1960年代半ばから1970年代中頃にかけては、柴田揮毫の「誠意・勤労・見識・気魄」や「任重而道遠」の色紙が印刷されて、卒業記念品として手渡されている。この柴田自筆の色紙は、1965（昭和40）年頃の揮毫と推測される。



1965 (昭和40) 年4月19日 館長訓話

柴田が担当した訓話は、毎週1回学年別に実施し、歴史や理念、社会情勢、日常の礼儀作法など多岐にわたる内容であった。



1967 (昭和42) 年2月 卒業面接

柴田は、卒業を予定する学生一人ひとりに卒業面接を行い、国士館で修得した智識を確認する場を設けて社会に送り出した。

創 立 者 かく

誠意とは、親切である。

勤労とは、働くことである。

見識とは、正しい理解力である。

気魄とは、責任を尽すことによって

次第に養われる「心の強さ」「信念の力」である。

「国土館の主義」(柴田徳次郎述『国土館と教育』1926年11月4日、一部改略)

国土とは、将棋の駒の「歩」の成ったようなものである。

「歩」は前列に並ぶ一番下の役目である。

ところが、いざ戦争となると、

その歩が前進し、敵地に入ると金に成る。

金将と同じ働きをするようになり、敵の王将をも打ち取ることができる。

敵にとっては、これほど油断のならない存在はない。

まさに向かうところ無敵の強さを発揮する。

「国土館大学の特質」(『国土館大学新聞』第42号、1965年6月)

国土館で学ぶ人は、人に奉仕をする。

人のために尽くせる人にならなければならない。

中学校・高等学校入学式式辞(「昭和36年度国土館諸行事 館長訓話速記録」1961年4月6日)

人生四里

一里 迷える人生 人生の入口

二里 悩める人生 もだえ、ヤケになる時期

三里 考える人生 他人の救いに頼る時期

四里 悟れる人生 身を捨てて人を救う時期

最後の四里に一日も早く到達することが、

人生の終極目標である。

「人生四里 悟りへの道」(『国土館大学新聞』第12号、1962年6月)

の「遺訓」

語りき

為学最楽

国家みかん説

一つ一つの粒=人民

それを包む小袋=秩序

白い内皮=人の道(道徳)

白い筋=法(法律)

外皮=国の護り(武備)

これらが全部がまとまって立派な「みかん」になる。

一粒だけでは生育できないし、一粒でも腐れば全部腐る。

「日本国家みかん説」(『国士館大学新聞』第16号・第17号、1963年1月・3月)

私の総長訓話(館長訓話)は、

秋の夜長を老人が「いろりの火」を囲んで、

孫に昔話をきかせるように、

人生観・日本観・世界観・世界の未来観を、

何のこだわりもなく、誰に遠慮もなく、

アラビアンナイト式に語り続ける。

「国士館大学の特質」(『国士館大学新聞』第42号、1965年6月)

★「館長訓話」

国士館大学では学生の人格形成を目的として、1973(昭和48)年まで独自の必修科目「実践倫理」を設け、学生は式典参加・校門警備などのほか、柴田の「館長訓話」を受講した。訓話後、学生は所感文の提出が必須となっていた。後年にはプリント「訓話資料」や小冊子が作成され、そのテーマは確認できるだけでも数十種類におよぶ。



主な訓話一覧

| 訓話名 | 内容 |
|------------|--------------------------------|
| 国士館標語 | 「誠意・勤労・見識・気魄」について |
| 国士館館歌 | 館歌の内容について |
| 人間と獣の区別 | 反省・同情・感謝・尊敬が人と獣の違い |
| 人間の目的は何ぞや | 人間の目的は「親になること」、恋愛は親になるための「道案内」 |
| 自愛心と愛国心 | 人間の一番根強い心は「自愛心」、自愛心+知恵=「愛国心」 |
| 悟りの道順 人生四里 | 人生の悟りの道順は ①迷い ②悩み ③考え ④悟りの四段階 |
| 国家論 | 国家の三要素は主権・領土・人民 |
| 子弟・交友の道 | 師には尊敬、先輩には敬愛、同輩には親愛 |



創立者 柴田徳次郎 略年譜

1890.12.20-1973.1.26

| 西 暦 | 和 暦 | 略 年 譜 | 国士館の沿革 |
|------|------|--|---|
| 1890 | 明治23 | 福岡県那珂郡岩戸村別所(現那珂川市大字別所)に誕生 | |
| 1905 | 38 | 実兄高木波次郎を頼り上京 | |
| 1912 | 大正 元 | 早稲田大学専門部(政治経済科)へ入学 | |
| 1913 | 2 | 青年大民団結成 | 牛込区細工町(現新宿区細工町)に青年大民団が発足 |
| 1915 | 4 | 早稲田大学専門部を卒業、中国大連へ渡航(大正5年春帰国) | |
| 1916 | 5 | 雑誌『大民』の主幹に就任、「此木田頑石」などの名で執筆 | 青年大民団、機関誌『大民』を創刊 |
| 1917 | 6 | 国士館館長に就任 | 麻布区筈町に、私塾「国士館」を創立 |
| 1919 | 8 | 財団法人国士館理事に就任 | 財団法人国士館を設立(設立者柴田徳次郎・小村欣一) 世田谷松陰神社隣接地(現世田谷キャンパス)に移転し、高等部を開設(学長長瀬鳳輔) |
| 1921 | 10 | ワシントン会議ほか欧米視察へ出発(大正11年帰国) | 国士館維持委員会が発足(会長栗野慎一郎) |
| 1925 | 14 | | 国士館中学校を設置(学長長瀬鳳輔) |
| 1926 | 15 | 国士館中学校校長に就任(～昭和9年) | 荏原郡西部6か町村合同経営の国士館商業学校を設置(校長大場信統) |
| 1929 | 昭和 4 | | 国士館専門学校を設置(校長水野錬太郎) |
| 1930 | 5 | | 国士館高等拓植学校を設置(校長上塚司) |
| 1932 | 7 | 国士館高等拓植学校校長に就任(～昭和9年) | |
| 1933 | 8 | | 満州鏡泊湖畔に満洲鏡泊学園を設置(総務山田悌一) |
| 1934 | 9 | 財団法人国士館理事や中学校校長など解嘱、国士館運営を離れる(～昭和16年) | |
| 1938 | 13 | 日刊『大民新聞』創刊、社長に就任(主筆坂口二郎) | |
| 1941 | 16 | 国士館専門学校校長に就任(～昭和20年) 国士館商業学校校長に就任(～昭和19年) | |
| 1942 | 17 | 国士館高等拓植学校校長に就任(～昭和20年) | 国士館高等拓植学校を設置 |
| 1944 | 19 | 国士館工業学校校長に就任(～昭和21年) | 戦時措置により、商業学校を国士館工業学校に転換設置 |
| 1945 | 20 | 公職追放を受ける(昭和26年解除) | 戦災で校舎を焼失(大講堂ほかを除く) |
| 1946 | 21 | | 法人・校名を至徳学園に改称(理事代表柴田梵天) |
| 1947 | 22 | | 至徳中学校(新制)を設置(校長鮎澤巖) |
| 1948 | 23 | | 至徳高等学校(新制)、至徳商業高等学校(新制)を設置(校長鮎澤巖) |
| 1951 | 26 | | 財団法人を学校法人至徳学園に変更 |
| 1952 | 27 | | 国士館大学維持委員会が発足(会長小坂順造) |
| 1953 | 28 | 至徳専門学校校長に就任(～昭和30年) 国士館短期大学学長に就任(～昭和48年) 学校法人国士館理事長に就任(～昭和48年) | 学校法人国士館に改称 国士館短期大学を創設 |
| 1958 | 33 | 国士館大学学長に就任(～昭和48年) | 国士館大学を創設し、体育学部を設置 |
| 1959 | 34 | 国士館高等学校・中学校校長に就任(～昭和48年) | |
| 1961 | 36 | | 国士館大学政経学部を設置 |
| 1963 | 38 | 学内「会報」にて、学園全体では「館長」、大学では「総長」の呼称と通達、総長に就任(～昭和48年) | 国士館大学工学部(現理工学部)を設置 |
| 1965 | 40 | | 小野路校地(現多摩キャンパス)取得 国士館大学政経学部二部、大学院(政治学研究科・経済学研究科)を設置 |
| 1966 | 41 | | 国士館大学法学部、文学部を設置、鶴川校舎(現町田キャンパス)開設 |
| 1970 | 45 | 勲二等瑞宝章 叙勲 | |
| 1973 | 48 | 逝去(享年84)、正四位 叙位 | 柴田徳次郎学園葬を挙行(葬儀委員長石井光次郎) |
| 1977 | 52 | 世田谷校舎大講堂前に柴田徳次郎銅像を建立 | |

※資料表記を除き「国士館」に統一し、常用漢字を用いた。

この冊子は創立者生誕130年(2020年12月)及び創立者没50年(2022年1月)に際し、国士館創立104周年記念・企画展「創立者柴田徳次郎 かく語りき」をもとに作成した。
(会期:2021年10月25日～11月4日/会場:世田谷キャンパス大講堂)



発行 2021(令和3)年11月4日
 学校法人国士館
 編集 国士館史資料室
 〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1
 TEL:03-3418-2691 FAX:03-3418-2694
 E-mail: archives@kokushikan.ac.jp
 印刷 株式会社 広英社